

会長メッセージ

# 人間も環境も「多様化」が大事。

ステークホルダーの皆様には、  
平素より矢崎グループの事業活動に  
格別のご理解とご支援を賜り、ありがとうございます。  
当社は設立75周年という節目の年を迎え、  
次代に向けて新たな一歩を踏み出しました。  
ここでは、当社がめざす今後の展望について  
お話しいたします。

矢崎総業株式会社  
代表取締役会長

矢崎 林 彦



## 現在に息づく矢崎の原点

矢崎グループは前身である「矢崎電線工業株式会社」を1941年に設立し、本格的にワイヤーハーネスの製造と販売を開始しました。創業者・矢崎貞美は「ものづくりを通じて社会に貢献したい」という想いを胸に事業を育て、現在は世界45カ国、29万人のグローバル企業へと成長しました。創業時と比べ、事業規模は大きくなりましたが、創業者の想いは社是や矢崎精神として、今で

もすべての従業員の価値観として息づいています。

当社の主力事業のひとつであるワイヤーハーネスの製造は、機械化が難しく、多くの人手を必要とすることが大きな特徴です。これはまた、当社の発展が、従業員はもちろん、世界中の地域社会の皆様の支えがあって成り立っていることを意味しています。これこそが、当社の使命が単に利益の追求だけでなく、地域社会の発展というかたちでお返しすることだと考える根源的な理由です。

## 人材育成こそ矢崎の歴史

当社にとって創業からの75年は「人材育成」の歴史であると言っても過言ではありません。

創業者は、従業員への教育にとても熱心でした。これは幼少期に経済的な事情から小学校しか卒業できなかったという悔しさと、何より学ぶことの重要性を誰よりも感じていたためであると想像しています。実際、創業者は外部機関と協働で設立した高校に従業員を通わせたり、各事業所を巡回しながら従業員とその家族を対象とした移動教室を実施したりと、できる限り多くの人に学習の機会を与えたものでした。

もちろん、過去も今も、そして今後も人材育成が当社の発展の基本であることはいささかも変わることはありません。

## 一人ひとりの個性を活かした魅力ある企業をめざして

当社は創業以来、「従業員を大切にする」という想いで福利厚生や制度の充実に努めてまいりました。その上で今後は、雇用や働き方に「多様化」という視座を加え、さらに一歩、前進しなければならぬと強く感じています。これは、めまぐるしいスピードで進化する技術、そして国境を越えたさまざまなビジネスの出現という新しい潮流に対応するために、企業として多様な価値観と、それを受け入れる土壌づくりが一層重要だと考えているからです。

とはいえ、29万人からなる当グループにおいて、雇用や働き方の「多様化」を実現することは決して簡単ではありません。しかし、多様化を進めることで従業員の能力が最大限に発揮されれば、想像を超えたシナジーが生まれるのではないかと大変期待しています。このためには制度だけでなく、従業員にとってやる気や誇りをもてる企業となることが大切であり、経営者として魅力ある仕事の創造に挑んでまいります。そして多様化の実現が、ものづくり企業としての価値をさらに高め、お客様にとって魅力ある製品やサービスの提供へつながると確信しています。

## 多様な命を育む地球環境を次代へつなぐ

さて、言うまでもなく、私たちが暮らす地球上は実に豊かな自然にあふれ、さらにそこには多くの生き物が生息しています。しかし現在、温室効果ガスによる異常気象などの地球環境問題は深刻化の一途をたどり続けています。これに立ち向かうために私たちは50年、100年先を見据えた活動が必要です。何しろ環境問題は時間がかかりますから…。当然のことながら、一世代では済みません。次代を担う子どもたちにこれを引き継ぐのも、我々大人が果たすべき大きな責任だと考えてきました。

こういった想いから当社では毎年、子どもたちに多様な体験の機会を与えることを目的としてサマーキャンプを開催しています。このキャンプを通じ、子どもたちが自然をわかりやすく学び、楽しく体験し、関心をもってもらうことを期待しています。なぜならその先にはいつか必ず、環境問題を何とかしなければという想いに行き着くはずだと考えているからです。

同様に、創業75周年記念事業の一環として、先ごろ、森をテーマとした『おいでよ森へ』というタイトルの絵本を刊行しました。この絵本では、森が自然や生き物のあらゆる循環の中心にあるということが描かれています。幅広い世代の方々にぜひお読みいただけたらと考えています。

これらをはじめとする私たちの取り組みが、もし、持続可能な社会づくりの次代のリーダーが生まれるきっかけになったとしたならば、これほど嬉しいことはありません。確かに、私たちの活動は環境問題のスケールからすれば、微々たるものに過ぎないかもしれませんが。例えそうだとしても、やはり今、我々にはやらなくてはならないことがあるはずだと考え、今後も地道に継続していくつもりです。

経営者として事業の発展はもちろん、冒頭に申し上げました地域社会が抱える課題と真摯に向き合い、これを解決しながら、ステークホルダーの皆様にとってより魅力ある企業となるべく、歩みを進めてまいります。ステークホルダーの皆様には一層のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。